

非暴力に基づく人間関係回復と宗教の社会的課題

背景・目的

今日貧困家庭が増え、関係性に恵まれない若者たちが増加しているにもかかわらず、市場原理が教育現場に導入され、「もっと頑張れ！」との叱咤激励の声を背に受けた若者たちが自分の本心を隠し続け、周囲との関係を引き裂かれることも珍しくない。深く傷ついた者が、暴力的社会システムに押しつぶされずに、自らの内に潜在する生きる力を引き出し、人間としての尊厳を取り戻し、人間関係を回復することはいかにし可能か。一方、海外では、政治的・経済的に抑圧されている人々が絶望的状况に瀕し、「善悪の闘争」という宗教的表象体系を援用して暴力を正当化する言説を展開している。個人単位であれ国家単位であれ、そのような暴力的状況に対応するために、本来的に体制変革を志向する聖書の世界観と人間観を学び、そこから暴力抑止につながる考え方を構築することは、教養教育としてのキリスト教教育のなすべき重要な社会的課題の一部であると考えられる。

実施内容

社会のあらゆる局面に見られる管理体制を排除したところざし教育と脱学校的試みを実践している特別講師、櫻井淳司氏（「いのちの泉」ニューライフ非暴力トレーニングピースセンター主宰）は、氏自身が体験してきた種々の具体的事例を通して「非暴力」の方法を提示した。

国家間関係の平和構築に関しては南京大虐殺の問題が取り上げられた。櫻井氏によれば、南京訪問と現地の人々との交流体験を踏まえ、自国の過去の過ちを認めること、相手国に与えた苦しみを全力で理解しようと努めること、怒りの原因を相手国に出し切ってもらうこと、並びに、膨大な時間をかけて相手国に徹底的に寄り

添う優しさを実践することが、無敵な状態を創り出し、敵国を友好国に変える。逆に、軍備強化路線は敵を作り出し、暴力の螺旋を助長する危険性がある。

このような非暴力による国家間レベルの関係回復の方法は、親子関係を含む個々の人間同士の関係回復にも適用できる。たとえば、子が親の意に反してリスクを伴う人生選択をする場合、親がこれを否定せずに受け入れる時、反発する子自身が自分自身の人生を冷静に見つめ直すきっかけが与えられ、親と子の対立が緩和される。声をかけること、支配しないこと、関与しないこと、対等であること、ほめることが、国家間関係や個々の人間関係の改善に結びつく。

櫻井氏はまた、財産・家族・故郷放棄のエートスに関連する史的イエスの有名な発言（マタイ 16・25 他）を引き合いに出し、二通りの生き方を説明した。一つは「与える生き方」（life for giving）、他は「獲得する生き方」（life for getting）である。人間存在を「人材」という名のモノとして扱う暴力的な現行の経済中心主義システムでは、後者が優先され、前者が後回しになる傾向がある。しかし、両者を対立的に見るのではなく、前者を life forgiving、後者を life forgetting として意味転換すれば、失われた自尊心と人間関係を回復していく道が開かれる。

結果及び考察

このように聖書学的知見と実践的知見との統合を意図した本研究は、知識提供型から課題共有型・感性享受型への転換が双方向的に共有される授業展開の可能性を追求した。受講学生たちの提出レポートからは、国家間関係と人間関係の両面における非暴力の創造的力を再考させられるきっかけが与えられたことが窺える。